

十住毘婆沙論に於ける發菩提心品と調伏心品について

釋 舍 幸 紀

十住毘婆沙論が十地經の註釋であることは常識とされている。十地經の註釋家としては探玄記や華嚴經傳記に依つて、インドに於ては龍樹・世親・金剛軍・堅慧の四人が一般に知られる。其の中、金剛軍・堅慧の註釋書は傳わらないため、その内容を知ることが出来ない。我々は龍樹の十住毘婆沙論と世親の十地經論とを見ることが出来るが、十住毘婆沙論が十地經の註釋書であるという記録は探玄記・華嚴經傳記が最初であつて、それ以來、十地經の註釋書であることは踏襲され、疑問を提出されないままである。近年、十住毘婆沙論と十地經の對比が學者によつてなされているが、その論文を参照して、兩者を比較検討してみると、十住毘婆沙論は十地經を解釋した註釋書であるといわれているが、(一)十地經と本論に引用された經文を比較してみると、照合出来ない部分があること、(二)世親の十地經論の如く隨文解釋でないこと、(三)更にまた、この經文が引用されている他の諸經典と同じように引用經の如き體裁をしていることが注意される。以上の三點

から十住毘婆沙論は十地經の註釋書としてよりも、十地經に依る修行階位を中心にした龍樹自身の思想と宗教實踐とを示した著作ではないかと思う。強いて十地經の註釋書とすれば、その立場は達意的な解釋とでもいえるだろうが、いま十地經に全く照合出来ない發菩提心品から分別功德品までの六品をみると、十地という行位を中心にした龍樹自身の宗教實踐論と考えるのが適當ではないかと思われる。ここで、發菩提心品と調伏心品を取り擧げたのは、十住毘婆沙論が特に發菩提心を重要視している點から、ここに兩品を本論全體からみた場合を考えてみよう。從來の見方では、淨土教學に於ける易行品の開演説をもつて、この論の主題とするのであるが、その主題に關連して、分別布施品以下の菩薩の修行道を辿つてみたとしても發菩提心ということから外れることはない。

さて、發菩提心品が說かれるまでに、入初地品から釋願品までの四品の論述は入初地品に「云何入初地。得地相貌及修習

地^③」ということより、入初地・得地・修習地を問題にする。地相品に「得初地菩薩有何相貌^④」とあり、更に、淨地品に「菩薩已得初地。應云何修治^⑤」ということよりして、入初地品では初地に入ることを説くのに對して、地相品では地の相貌を得ることを説き、淨地品では初地を修習することについて論述している。次いで、釋願品に「已説入初地方便及淨治法。菩薩因願改得入諸地^⑥」と述べるが、これは願に因つて諸地に入るのだから、願は初地・二地・三地というようにそれぞれの地に入るためにたてられることを意味している。それ故に發菩提心品が説かれるまでの四品は、入初地品と地相品以下釋願品までの三品とに分けられる。入初地品では入初地の立場から説いたのに對し、地相品以下の三品は得入初地の立場から説かれている。十地經では、この部分がすべて得入初地の立場より説かれているからして、十住毘婆沙論の立場とは異つていと云わねばならない。十住毘婆沙論での構成は入初地品から發菩提心品調伏心品となる。即ち、入初地品では發菩提心を説くが、菩提そのものについて論じたものではなく、むしろ發菩提心の立場を強調している。その立場に於てこそ發菩提心の説かれる所以があると云える。發菩提心品ではこれまた菩提そのものについて論じたものではなく、菩提心を發することの因縁について論じたものである。ここでは、智印經を立場として三と四の七因縁を述べる。前三者

は根本深き故に必ず成就し、後の四者は根本微弱の故に成・不成のあることを示す。後の四者の成・不成よりして、次の調伏心が必然的に生ずる。菩提心の行を發せども菩提心の法を失えば不成であり、失わねば必成である。不成よりして、菩提心を失う法を説くのであるが、その法とは「五個の四法」即ち二十法を以て失菩提心の法を示す。しかるに、「此五の四法を轉じて」と云いながら藏經には四しかないが、宋・元・明・宮本には「復次若於善知識其心懷結恨。亦有諂曲心。貪諸利養等^⑦」を五言四句の偈にしているから、一法とみなすことが出来る。發菩提心品の成・不成の不成である後四の因縁を一法に加えることは調伏心品に「何等法失菩提心^⑧」ということから不當である。此の五個の四法は Kaśyapa-piṣaṭṭa の影響を受けて、その背景のもとに論述されたものであるが、調伏心といいながら失菩提心の法を擧げるのは善行を修して無上菩提心を失わないということであつて、心を調伏して行くことを示す。以上の如く考察する時に、發菩提心品・調伏心品は共に短かい一章であるが、發菩提心ということより、重要な意味をもち、入初地品・發菩提心品・調伏心品という一連の繋りをもつことに於て、此の兩品は再考されねばならない。ところで、發菩提心については具には入初地品で説く。そこで、入初地の方便を明すところを梵文十地經 (Radier 本) 十地經 (羅什譯)・十地經論・十住毘婆沙論を

それぞれ對比した結果、兩者の發菩提心に就ての考え方は、完全に一致しているとはいえない。經では發菩提心の目的が佛の十力を得る爲であり、更に菩提心が發るや否や即時に凡夫地を過ぎて菩薩位に入ると述べる。これに對して論では佛の十力を得ることが發願と必定聚に入ることの目的として說かれる。その説明を長行では「問曰。得何利故能成此事入必定地。又以何心能發是願。答曰。得佛十力能成此事。入必定地能發是願」と論述する。ところで、問題は「答曰。得佛十力……云々」の漢文は如何に讀むべきらあろうか。問の意は「如何なる利を得る故に此の事を成就し佛道に於て必定地に入るのか、また如何なる心に於て是の願を發すのか」ということである。「此事」と「是願」の是とは直前の「發願我得自度已當度衆生」という願の内容を受けている。しかるに答の意はこの漢文の讀み方にある。もし、「佛ノ十力ヲ得テ能ク此ノ事ヲ成ジ」と讀めば、佛の十力を得ることに於て入必定地に於てこそ發願するということになる。若し、「佛ノ十力ヲ得ンタメニ能ク」と讀めるとすれば、次後に佛十力を説明し、その結文の「爲レ得ニ如レ是佛十力ニ故大心發レ願即入ニ必定聚ニ」に一致する。ここで、「佛十力」・「發願」・「必定地」の三者の關係は佛の十力を得ることに於て入必定地にこそ發願するということと、發願して必定地に入ることに於て佛の十力を得るといふ兩方の意味を併せ考へるべきであらう。と

ところでそういう菩薩は佛の十力を得ん爲に大心に願を發して必定聚に入るが、その大心とは先に云つた問の「何の心」をさしている。智度論によれば大心とは發善心を意味している。更に十住毘婆沙論が十地經と異なる點は初發心時に必定地に入る者もあれば、釋迦牟尼佛の如く漸修功德によつて必定地に入る者もあることであつて、一切の菩薩が初發心時に必定地に入るのは邪論であるとする。これは佛の所説の經を聞いて第一義に通達する大智人のためではなく、鈍根懈怠にして經文を讀誦することの難しい人のためにこそ此の論が造られたことからみても、龍樹自身の思想が充分に發揮されているといえる。そして、龍樹に於ては即時に必定地に入る者を問題としてゐるのではなく、漸修功德という點に主眼を置くのである。十地經の發菩提心を述べる部分について十地經論では四十句をあげる。四十句とは十地經の經文であり、十住毘婆沙論で云えば入初地の方便を示す部分にあたるが、これは發菩提心の經文四十句であるから十地經と一致する。十住毘婆沙論に四十句なる文字が同處にみられるが、無盡意品 *śrīyaśamanī-niḍesa* 中に廣説することと云つて、無盡意經の發菩提心に關する部分を引用する。これは發心の菩薩と釋迦牟尼佛の初發心という兩者の心を問題にしたのであるから、龍樹は發菩提心の心を如何に重視したかは論をまたないであらう。しかも初發心の時、必定地に入ることを示すため

に、無盡意經が引用されるのは無盡意經が十住毘婆沙論にとつて如何に重要であるかを示すものである。この意味に於て十住毘婆沙論に引用される無盡意經の場所をみると次の如くである。

- ①（入初地品）無盡意菩薩。於二和合品中。告三舍利弗。（大正大藏經26・23 c）
- ②（" "）如三無盡意品中廣說。（同、24 c）25 a）
- ③（分別布施品）寶頂經中無盡意菩薩第三十品檀波羅蜜義中說。（同・50 a）
- ④（" "）無盡意菩薩會品中檀波羅蜜中說。（同・50 c）
- ⑤（" "）如三無盡意菩薩經檀波羅蜜品中說。（同・51 a）
- ⑥（歸命相品）如三無盡意菩薩經中說念佛三昧義。（同・55 b）
- ⑦（護戒品）如寶頂經中和合佛法品中。無盡意菩薩於三佛前說三六十五種尸羅波羅蜜分。（同・109 a）
- ⑧（" "）如三無盡意菩薩尸羅品中三語舍利弗。（同・111 a）
- ⑨（" "）如三無盡意菩薩尸羅品中說。（同・111 b）

入初地品に2回、分別布施品に3回、歸命相品に1回、護戒品に3回、計9箇所引用があるが、その經の引用されるところには必ず十地經が引用されることから、十地經の文意を示す偈文の解釋下におかれていることは注目すべきことである。入初地品については先にいつた如くであるが、分別布施品に於て施の本義を示すために無盡意經檀波羅蜜品を引く（左記の③・④・⑤）。施の具體的なあり方は歸命相品に財施

と法施とを説くことによつて知られる。しかも、その論述は郁伽長者經 Ugradata-paripiccha の立場からなされる。そこで、十住毘婆沙論に引用される郁伽長者經をみると、歸命相品・五戒品・知家過患品・入寺品に連續的に引用され、現存の大集經の郁伽長者會のほとんど全體が論を構成している。郁伽長者經に依れば菩薩は發心を契機とするものであること、更に無盡意經による施の立場を説明するために用いられたことなどから無盡意經との關係が深いことが知られる。

次に、護戒品で無盡意經の説く六十五戒が示されるが、龍樹の菩提資糧論の自在比丘の釋からも知られるごとく六十五戒は大略一致する。しかも無盡意經では發心・不退轉・六波羅蜜中の戒を説く所に菩提心を根本とするといっているから戒律にも關係深いことが知られる。

入初地品に發菩提心を無盡意經から説述することからして、發菩提心品で發心の因縁を説き、調伏心品で失菩提心の法をあげ、分別布施品で施を示し、その具體的なあり方を郁伽長者經で示すと共に、護戒品で戒を説くことによつて、本論の組織は發心↓施↓戒という形をとる。更に發心そのものからいえば、發心↓調伏心↓歡喜地となる。發菩提心品と調伏心品等を入初地の補説とすることは調伏心に大きな意味があることから不當であつて、むしろこれらの品で入初地について为中心的論述がなされていると思う。

以上の如く考察するとき、十住毘婆沙論は十地經の單なる注釋書としてよりも、十地經無盡意經を依りどころとして龍樹自身の思想と宗教實踐を示したものとみるべきである。

- 1 須佐晋龍「華嚴經十地品の研究」(『現代佛教』昭和五年)、長谷岡一也「十住毘婆沙論に於ける十地經の引用について」

(『印度學佛教學論叢』一七七一—一八六頁)

- 2 大正・26・23 a 3 大正・26・26 a 4 大正・26・28 c
5 大正・26・30 b 6 大正・26・37 a 7 大正・36・b
8 大正・26・24 b 9 大正・26・24 b 10 大正・26・24 c
11 大智度論卷四、(大正・25・86・a) 及び同論卷五十三、(大正・25・435・c) に述べる。
12 大方等大集經卷第二十七無盡意菩薩品第十二ノ一(大正・13・187・b) に一致する。

新刊紹介(五)

佛教大學民間念佛研究會編

「民間念佛信仰の研究(資料編)」

第一編 民間念佛信仰に關する照會文獻調查表

百萬遍念佛／双盤念佛／六齋念佛／踊り念佛／大念佛／その他の民間念佛信仰

第二編 民間念佛信仰に關する實地調查報告

百萬遍念佛／双盤念佛とその系統に屬する念佛／念佛踊り／大念佛とその系統に屬する念佛／その他の念佛—農耕・追善の念佛儀禮、聖衆來迎會に關するもの—

第三編 民間念佛信仰の文獻資料

融通念佛緣起について／空也上人繪詞傳について／一向上人傳について／佛向寺緣起について／十夜念佛緣起について／淨土常修六齋念佛興起について／六齋支配村方控牒について／百萬遍念佛緣起について／四遍和讃について／法國寺六齋念佛

A5判 五七九頁 索引三八頁
隆文館刊 定價 二、八〇〇圓